

肝細胞癌 (HCC) の菌肉転移は非常に稀であるが、今回我々は HCC の再発とともに菌肉に腫瘍形成を認め切除した症例を経験したので報告する。

症例は 78 歳男性で、肝 S5 に 2.2 cm 結節型の HCC を指摘され S5 S6 切除術を施行した。病理所見は trabecular type の HCC であった。術後約 6 年 8 カ月後 S7 S8 に再発を認めたため TAE, MCT, PEIT を施行したが再発後約 1 年後菌肉に腫瘍が出現しこれを切除した。病理所見では poorly differentiated squamous cell carcinoma であったが、HCC との鑑別が困難な組織像であった。

#### 肝血管肉腫の 1 例

(済生会栗橋病院内科, \*東京女子医大第二病理) 麻生智子・清水 健・梁 京賢・笠島 武\*

症例は 31 歳男性で、1998 年 4 月の検診で肝機能異常はなかった。同年 7 月下旬から腹部膨満感が出現し、9 月より食欲低下、下肢の浮腫を認め 9 月 16 日外来を初診した。黄疸、肝機能障害、多発性肝腫瘍、腹水を認め 9 月 28 日入院した。B, C 型肝炎ウイルスマーカー、腫瘍マーカーは陰性であった。腹部 CT, MRI, 血管造影、肝生検より肝血管肉腫と診断した。アドリアシン 20 mg/週、マイトマイシン 5 mg/週のリザーブ動注化学療法を 2 週間試みたが効果なく腫瘍は増大した。11 月 6 日食道静脈瘤破裂し、食道静脈瘤結紮術で一時止血したが再度出血し、出血性ショック、肝不全で死亡した。

肝血管肉腫は肝原発の悪性非上皮性腫瘍の中では最も頻度が高いが、一般人での発生頻度は極めて稀である。今回我々は貴重な 1 例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。

#### 内視鏡的に止血困難であった上部消化管出血症例の臨床的検討

(湯河原胃腸病院) 篠原知明・吉田 充・福田俊夫・依田勇二・吉田 裕・中村英美・福田 滋

〔目的〕内視鏡的止血術が困難であった腫瘍、静脈瘤を除く上部消化管出血症例を検討し臨床像を明らかにする。

〔対象〕1994 年 4 月から 1998 年 12 月までに内視鏡的止血術を施行した 38 例である。

〔結果〕38 例に永久止血が得られた。4 例に手術を要し全例胃潰瘍であった。手術例全例に潰瘍底の露出血管を認め 3 例に活動性出血を認めた。

〔結論〕初回検査時に活動性出血、潰瘍底の露出血管を認める症例は止血困難で、処置後の止血確認が特に重要である。手術症例は止血術後 4 日以内に再出血、出血性ショックに陥っており、この間の嚴重な経過観察と急変時の迅速な対応が重要である。合併症併存症例には手術時期を含めた、適切な全身管理が重要である。

#### 多段階発癌を示唆した 12 多発早期胃癌の 1 例

(八王子消化器病院, \*東京女子医大第二病理)

島田昌彦・林 恒男・羽生富士夫・笠島 武\*

症例は 81 歳女性で、食欲不振で内視鏡検査を行い胃癌と診断された。胃内視鏡上、前庭部から体中部に山田 2-3 型の隆起性病変を多数認めた。生検の結果は 6 個の中分化型腺癌と 1 個の腺腫であった。胃切除術を行い、12 個の中、高分化型早期胃癌、3 個の腺腫、3 個の過形成ポリープが存在した。深達度は 1 病巣は粘膜下層、他は粘膜内であった。癌周囲には高度の腸上皮化生を認めた。

検索し得た 10 病巣以上の報告例は自験例を含め 7 症例で、組織型は多くは印環細胞癌であった。発癌機序の一端を知るため、p53 と cyclin D1 の病理学的検討を行い、腸上皮化生と過形成部に cyclin D1, 腺腫と早期癌部に p53 の発現を強く認めた。この結果、癌関連遺伝子の異常等による多段階発癌の可能性が示唆された。

#### DIC 胃癌に化学療法が著効した 1 例

(上福岡総合病院外科)

吉利賢治・井上達夫

症例は 52 歳男性で、胃癌の診断で入院となった。大動脈周囲に累々としたリンパ節転移を認めたが、胃全摘+脾臓合併切除を施行した。術直後より血小板の低下、FDP の上昇等を認め、癌による DIC の診断で MTX-5 FU 交代療法 (MTX 100 mg + 5 FU 500 mg + ロイコボリン 10 mg × 6) を 2 クール施行した。FDP 値が化療後はほぼ正常化し、パフォーマンス、ステータスの改善も認めていたが、状態が急変し、3 クール目施行したが、術後 5 週で死亡した。

今回通常の DIC 治療が無効であった。DIC を来した進行胃癌に対し、MTX-5 FU 交代療法を施行し、短期間ではあったが効果を認めたので報告した。同療法を施行し退院できた報告例もあり、あきらめず積極的に施行すべきと思われる。

#### Stage IVb 末期胃癌に対し左上腹部内臓全摘術を施